

人にも如来の大悲に出会ってもらうための「和光同塵」の仏事なのです。

## 第4章 歓喜光院御崇敬

能登を代表する真宗行事が歓喜光院御崇敬です。天明8年(1788)1月30日、京都の大火で本願寺も両堂・経蔵・学寮などを焼失、焼け残ったのは宝蔵・枳殻邸などほんのわずか、という出来事が起こりました。能登門徒は貧しくて、十分な志納ができなかった代わりに、大工や人夫としてたくさんの方が、13年間行きっぱなしで奉仕しました。そのおり、寝起きをともにした話所(門徒の宿泊所)へ第19代歓喜光院乗如上人がおとずれて法義を語り、門徒と親子のような間柄になりましたが、上人は志半ばで病死されました。そこで再建が完成した時、門徒たちは第20代乗如上人から歓喜光院の画像をもらって故郷へ帰り、村々を巡回させました。この仏事は新潟県・滋賀県・愛知県などにも残っていますが、どこよりも盛大に行われているのが、大工や人夫をたくさん出した能登です。しかも能登の門徒はこれを素晴らしい仏事に育て上げたのです。

1983年能登の羽咋郡富来町正念寺で営まれた、5日間の御崇敬のクライマックスである御示談の記録が残っています。護持会員は約1300人。大連夜の夜は16名が御示談を行いました。信心についてふだん抱いている疑問を質問者が独特の歌うような感じで問いかけます。これを質問者からは「私の間違いを正してください」「私を育てる言葉をください」「私は深く悩んでいます」といった言葉がひんぱんに出てきます。それに対し、指名された回答者が「私が日頃思っていることを聞いてください」といって意見を述べていきます。簡答にひとまとまりつくと、司会が「オミトー」と声をかけ、念仏をあげ、答弁者が交替してふたたび御示談が始まります。午後11時30分と午前1時に15分ほどの説教があり、御示談が終ったのは午前2時40分でした。午前3時から晨朝のお勤め。最後の説教が終ったのは午前3時50分。この日、最後まで本堂に残ったのは70名。年配の人々が徹夜して仏法を語り合う姿は感動的ですが、決して深刻ではありません。御崇敬中は念仏と笑いに包まれている感じさえます。この年の正念寺の御崇敬は能登教区第4組30ヶ寺、門徒2000戸にささえられ、本堂に入りきれない人々のために仮設ステージが設けられました。養銭の3分の2を本廟護持代として本山に納めても、これまで赤字になったことは1度もないといえます。それはなぜかという、がんばっているからではなく、心から楽しんでいっているからなのでしょう。(西山郷史『蓮如と真宗行事』)

## 第5章 寺院を道場に還元する

関東大震災と東京大空襲の両方を体験した柳宗悦は、真宗について次のように述べています。

たとえ震災、火災、戦災に襲われても、最も復興の迅速なのは真宗である。この点では他の宗派は及びもつかぬ。戦時中幾多の梵鐘が供出に潰えたが、早くも朝夕に鐘が鳴り始めたのは真宗の寺々である。それほど信徒の熱意が寺を眠らせておかない。(『真宗素描』2)